

生徒が乳幼児と交流

母親対象の
パン作りも

高田高校で保育実習

県立高田高校(村上弘校長、生徒365人)は1日、保育士や助産師を志す生徒らを対象にした実習を校内で行った。生徒が乳幼児と触れ合ったほか、子育て中の母親を対象にしたパン作りも実施。地域と連携した2年目の取り組みで、体験を将来への糧にした。

この取り組みは、生徒らのキャリア教育や、地域と協働・連携しながら学校運営する「コミュニティ・スクール事業」の一環で昨年からの実施。触れ合う機会が少ない乳幼児と生徒の交流や、学習環境を生かした地域貢献、学校の取り組み発信などが狙い。



地域の母親から預かった乳幼児と接する生徒ら(電子新聞に別写真あり)

昨年は3年生を対象にしたが、今回は、新型コロナウイルスの影響により保育所などでの今後の実習予定が不透明な状況を受け2年生も参加可能に。生徒合わせて18人が参加し、協力した市の保育士らがサポートした。

この日は市内の親子9組が来校。生徒らは、生後3カ月〜2歳7カ月の乳幼児を笑顔で迎え、抱っこしたり泣いている子をあやしたり、おもちゃで一緒に遊んだりと積極的に触れ合った。

一方、母親たちは、実習でパン作りを行っている海洋システム科生と一緒にあんパンとメロンパン作りに挑戦。生地をこねて丸める作業に没頭し、子育て親同士の会話も楽しみなが息抜きした様子だった。

保育士の免許取得を目指している志田みなみさん(2年)は「生後4カ月の子を預かっておもちゃで遊び、とてもかわいかった。保育士になればいろいろな子と接すると思うので、今回の実習での経験を生かしたい」と意気込む。

実習担当の日山玲教諭(38)は「実際に体験してみることによる魅力もある。赤ちゃんに触れた生徒たちには、自分らしい志望理由を見つけてそれぞれの進路に進んでほしい」と願っていた。